
アリアンス・マリアルのの 50年とその後



Alliance Mariale

2016.March

目次 ~~~~~

■ 序	3
■ アリアンス・マリアル	6
■ アリアンス・マリアル	6
■ アリアンス・マリアル	8
[1] アリアンス・マリアル	9
[2] アリアンス・マリアル	11
[3] 50周年を迎えたアリアンス・マリアル	14
✦ 会員の現況 (2015年11月現在)	15
◆ アリアンス・マリアル	16



■ 序

1) アリانس・マリアルとの出会い

私は 30 歳の終わりに「マリアニスト」という信仰共同体の存在を初めて知りました。

当時、信徒数の多い大きな小教区に所属していた私は、独身であることもあり、信仰生活を維持していくうえで、共に祈り分かち合えるような信仰グループを探し求めていました。

そんな時に、インターネットのカトリック関連のホームページで、マリアニストの存在を知り、「ソダリティー」という信徒マリアニスト共同体（MLC）の主に昼間働いている社会人のグループの集いに参加するようになりました。

そして、その翌年の 1 月に、そのグループの母体となっている「マリアニスト家族」（男子修道会：『マリア会（SM）』と女子修道会：『汚れなきマリア修道会（FMI）』が共に形成している霊的家族共同体）の新年会に初めて参加しました。

それまで、小教区での活動・集いしか知らなかった私には、司祭、修道者、信徒の枠を超えて、共に集い、祈り、分かち合い、食事をし、楽しい時間を過ごしている姿はとても印象的で、しかもとても楽しい時でした。そして、それをきっかけにマリアニストとして歩んでいきたい思いがとても強くなりました。

同時にその頃は、かねてから心の中で捨てきれないでいた「在俗会」への思いが再燃していた時でもありました。けれども、世界のマリアニスト家族には「アリانس・マリアル」というグループはすでに存在していましたが、日本には会員がいないため、その存在は記されていたものの、それに関する情報を得られるものは全く存在していませんでした。それ故に、全く日本人会員が存在しない故に（当然のことながら、日本語は通用しないので）、思い悩み、他の在俗会へ召命を模索することも考えましたが、どうしても、マリアニストとして生きる思いを捨てることができませんでした。結局、もし「アリانس・マリアル」に入会できなかつたら、信徒マリアニスト共同体において、マリアへの奉獻を行い、信徒マリアニスト共同体の一員として生きていこう、そういう結論に至り、勇気をもって、ソダリティーグループの 1 人の会員を介して、マリア会の清水神父様へ自分の思いを伝えました。

その結果、清水神父様と汚れなきマリア修道会のシスター小林が、私の養成に携わって下さることになり、半年余りのアスピラント期間を経て 2006 年 12 月 8 日の無原罪の聖母の祝日に、マリア会、汚れなきマリア修道会、信徒マリアニスト共同体の会員の立会いのもと、アリانس・マリアルの志願式を迎えました。

その後、清水神父様とシスター小林による養成とマリアニスト家族の方達の祈り、様々な温かい心遣いと励ましに支えられながら、1 年間の志願期とそれに続く 2 年余りの修練期を過ごし、2010 年 10 月 10 日（土）に、マリアニスト家族の立会いのもと初誓願を宣立しました。その際には、アリانس・マリアルの総責任者であるクリスチャン・バルボーもフランスから来日しました。

アリانس・マリアルの志願者として歩み始めた頃は、私自身がフランス語を習得することが出来なかったために、アリانس・マリアルとの実際の関わりはスペイン語による年に数回の、責任者との手紙によるやり取りにおいてのみで、総責任者から送られてくる、アリانس・マリアルのメンバー同士の絆を深める主要な会報誌「Lien（リャン）」（フランス語で「絆」の意）も全く読む

ことができませんでした。その当時は日本のマリアニスト家族の存在との関わりが唯一、私がアリアンス・マリアルのメンバーとして歩み続けられる原動力だったと言っても過言ではありません。

2) 会員としての絆・喜び

修練期の2年目を迎えた時、新たに現在の総責任者であるクリスチャン・バルボーがアリアンス・マリアルの総責任者となり、私のアリアンス・マリアルの会員としての状況は大きく変化しました。

まず第一に、会報誌「Lien」についてですが、スペイン語圏の会員と同様に、スペイン語版のものが私に送られてくるようになったのです。フランス語は習得出来ませんでした。スペイン語についてはアリアンス・マリアルを志す前から、個人的に勉強を続けており、辞書を使えば、ある程度のスペイン語は理解することができるようになっていたのです。スペイン語版の「Lien」が送られてくるようになり、総責任者のメッセージや世界の各国で生活している会員の生活や考えを理解することができ、情報を得ることができるようになり、本当の意味で、アリアンス・マリアルの一員としての意識を持ち、歩めることができるようになりました。

またクリスチャン・バルボーは自分が総責任者になった直後に、会員達の合意を得て、会員同士の交流、伝達手段を郵便からインターネットに変更しました。このことにより、会員同士のやり取りは活発化され、会員の入会や誓願や訃報だけでなく、会員及びその家族の健康状態、その国の状況までが、瞬時に、インターネットを通して各会員に届けられるようになり、それに基づき祈りを捧げ、メッセージを送るようになり、会員同士の絆と、遠く離れて散らばって生活していても1つの共同体であるという意識は、会員達の中で現在に至るまで強められています。

私自身も拙いスペイン語ではありますが、インターネットを通して総責任者を初めとして、様々な国の会員と少しずつ交流を持つようになりました。2011年に起きた東日本大震災の折には、自分が全く想像しなかったことですが、世界中の会員が自分のことのように私の安否を心配してくれ、アリアンス・マリアルの一員であることの喜び、絆を強く感じたのは言うまでもありません。

3) 本書編纂の経緯

ところで、アリアンス・マリアルは私が初誓願を宣立した直後の2011年に創立50周年を迎え、フランスのアントニーにてその記念式典が行われ、その直後に記念誌も刊行されました。

シスター小林の便宜を得て、まだ殆どアリアンス・マリアルについての知識がない日本のマリアニスト家族に、アリアンス・マリアルについて知ってもらうために、その記念誌の中のアリアンス・マリアルの50年の歩みについて書かれたものを、スペイン語から日本語に翻訳し、マリアニスト家族の会報「MARIANIST」誌に、数回に渡って掲載しました。

そして、それを総責任者に報告したところ、正式文書として、日本のアリアンス・マリアル文書庫に保管してほしいと依頼を受けました。

そこで、保管するなら、今後、アリアンス・マリアルについて興味を持たれた人達に、小冊子としていつでも提供できるような形にして保管した方がいいのでは、という思いに至りました。

アリアンス・マリアルは会として、会員の生活、職業、経済面の保証は一切しません。霊性と祈りと絆を信じる心によってのみ支えられた共同体です。そのような私たちアリアンス・マリアルについて、同じ家族を形成する2つの枝、男子、女子修道会の日本の会員達からは、「アリアンス・マリアルの生活は厳しい」、「アリアンス・マリアルの生活は凄い」と何度も言われてきました。

アリアンス・マリアルには現在、アジアの会員どころか、英語圏の会員も存在せず、日本語も英語もコミュニケーション手段として使えないことが、より一層そのような印象を与えているのかもしれない。

けれども、アリアンス・マリアルの生活は全く信徒の生活と同様です。生活や職業の不安定さも、経済的な不安定さも、社会の多くの人達が同様に日々持ち合わせているものです。そして、その不安定な社会で生活する人達に常に寄り添い、共に生き、奉仕することによって福音宣教を行ったイエスの生き方に、聖母マリアの生き方に、とことん倣っていくことを、信徒の立場に留まりながらも自分の全てを神様と全ての人のために捧げ、修道者的精神を生きていくことを、私たち信者は心から望んでいます。だから、在俗会の会員に対して「奉献された信徒」という言葉を用いるのです。

ただ、それ故に、社会の中で世間一般の人と同様に生きるが故に、その国に起こる様々な出来事に会員達が翻弄されてきたことも事実です。内戦や大震災、不慮の出来事、個人的なことにおいては、家族の病気や死、自分の病気や孤独との闘い…。会を去らなければならなかった会員もいます。

それでも、私たちアリアンス・マリアルの会員は、自分達の霊性と生き方を信じ、絆を信じ今日まで歩んで来ました。現在も歩んでいます。これからも歩み続けていくでしょう。

私は、そのような世界の中で、様々な困難と闘いながら日々歩み続けているアリアンス・マリアルの会員を心から誇りに思っています。国境とアイデンティティーを超えて共に歩めることを心から感謝しています。

今後とも、世界の動きのように、アリアンス・マリアルも神様の御旨に従って、様々な変化を続けていくことでしょう。現在会員が存在する国であっても、将来は存在しなくなるかもしれません。現在会員が存在しない国であっても、数年後には志願者が現れるかもしれません。会員が存在しなくなった国でも、何年か後には、志願者が再び現れるかもしれません。

私達アリアンス・マリアルの会員が、創立者達が残した霊性とアリアンス・マリアルの存在、共に歩み続ける価値を心から信じ、誇りに思い、福音宣教者としての情熱を失わない限り、これからも世界のどこかで、他のマリアニスト家族の枝と共に、マリアニストの1つの枝として存在し、福音宣教を続けることを私は心から信じています。

2016年3月

アリアンス・マリアル日本人会員
マリア・テレサ 田中 正江

■ アリانس・マリアル

1. アリانس・マリアルは、マリアニストの創立者であるギョーム・ヨゼフ・シャミナードの霊性に促されたカトリック教会の中の 1 つの共同体であり、「在俗会」として、マリアニスト家族の 1 つの枝を成しています。
2. アリانس・マリアルは、会員があらゆるものを聖化し、使徒職が集約されている「神の掟」をより良く生きるために、さまざまな点において、会員を手助けしていきます。
“心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい”(ルカ 10・27)
“互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように”(ヨハネ 13・34)
3. この共同体は、会員が福音的聖性において進歩できるように、また、人びとの間で神の国の本物の証人となれるように、社会に留まり、復活したキリストの力によって世界を内部から変える存在となるために、さまざまな状況で、さまざまな人と共に祈り、仕事や奉仕活動を通して、福音的な生き方を目指しています。

■ 日本のマリアニスト家族におけるアリانس・マリアル

マリア会司祭 清水一男

この度、『アリانس・マリアル 50 年とその後』が刊行されることになり、この刊行は日本のマリアニスト家族にとり、また、在俗会に関心のある方々にとって、大変意義深いものであると思います。教会の中に在俗会が存在することは知っていても、それが何であり、どのような意義を持ち、具体的な生活がどのようなものかを理解している人は少ないのかもしれない。

マリアニストの創立者、福者シャミナード師と尊者アデル・トランケレオンのビジョンは、フランス革命によって根底から覆された教会を初代教会を模範として再建することでした。そのために信徒マリアニスト共同体(MLC)を創設し、その発展過程の中から現在のアリانس・マリアル(AM)の前身である在俗会が誕生し、この両者を永続させるために、「汚れなきマリア修道会」FMI(女子部)と「マリア会」SM(男子部)の男女修道会が創立されました。

日本におけるマリアニストの存在は、1888年の「マリア会」(SM)の来日に始まり、1949年の「汚れなきマリア修道会」(FMI)の来日、1986年の信徒マリアニスト共同体(MLC)の正式誕生と歴史を刻み、2010年にアリانس・マリアル(AM)の最初の会員が誕生して、マリアニスト家族を構成する4つの枝が全て揃うこととなりました。



アリアンス・マリアルの最初の志願者はその希望を表明し、養成段階を経て、2010年に初誓願を宣立し、家族として生活を共にする歩みの中で、日本のマリアニスト家族の中には大きな変化が起きました。マリアニストが集うあらゆる機会にアリアンス・マリアルの会員がそこにMLC会員と共に存在し、祈り、分かち合い、交わる姿を通して、具体的にマリアニストが何であるかを体験できたからです。これは本当に大きな恵みでした。

日本におけるマリアニストは長い間男女2つの修道会だけで、会員たちも、自分たちの修道会が信徒を含む大きな家族であることを意識することはあまりありませんでした。第二バチカン公会議後、男女マリアニスト修道会は教会の要請に従い、自分のアイデンティティを明確にする取り組みを加速させました。その歩みの中でMLCが日本に誕生して、家族としての意識が芽生え深まりましたが、2000年のシャミナード師の列福はこの意識を大きく飛躍させる機会となりました。その時まで、アリアンス・マリアルは日本のマリアニストにほとんど知られていませんでしたが、公式の行事の中で4つの枝の責任者が家族の代表として行動している姿を見たとき、初めて、マリアニストの世界にアリアンス・マリアルが存在していること、私たちは家族であることを実感したからです。このような経過の中でアリアンス・マリアルが誕生し、家族の会報誌「マリアニスト」に2012年から連載された「アリアンス・マリアルの50年」の記事は、家族のメンバーがアリアンス・マリアルを理解する上で大きな助けとなりました。

マリア会の「生活の規則」第二巻、第一章「マリアニスト家族におけるマリア会」の1-2条は、「マリア会とマリアニスト家族の諸団体を結ぶきずなの強化は、相互に補充すべき任務を一層理解させ、教会の共通の使命に進んで協力させる。実際、私たちはマリアニスト家族として働くキリスト者と交わる時、自らが修道者であるということを一層深く理解する」と述べています。アリアンス・マリアルの存在は、マリアニスト家族のメンバーに自分のアイデンティティは何であるか、創立者のカリスマは何であるかを絶えず問いかけます。4つの枝から成るマリアニストが、信徒と修道者それぞれの身分の独自性と独立性を尊重しながらも、マリアを中心とした初代教会の共同体を模範として家族を形成し、福音を生きるお互いの深い交わりの中に成長し、福音を宣教する使命に生きる時、私たちマリアニスト家族は日本の教会に大きな貢献をすることができるのではないかと思います。アリアンス・マリアルの存在がマリアニスト家族をますます活気づけ、日本の教会を成長させる「からし種」の役割を果たすことを希望します。

■ アリانس・マリアルの総責任者からのメッセージ

親愛なる「MARIANIST」の読者の皆様

マリア・テレサ(田中正江)のこの度の発案に対し、深く心を打たれ、このメッセージを皆様に送ります。

この会報のお陰で、私が皆様に挨拶することができるなんて、こんなに嬉しいことはありません！

マリア・テレサが皆様にアリانس・マリアルについて知らせようとしていること、このすばらしい思いつきに対して、私は喜んでいきます。更に、彼女が社会的環境の中で、世界中に散らばっている私達全ての会員との関係において、奉献された信徒として自力で生活していることを知らせることができることも嬉しいですし、地域レベルや国際的レベルにおいて、そのメンバー同士の中であっても、アリانس・マリアルのマリアニスト家族の中での存在価値に目を留めていただけることが、嬉しいのです。日本においては、会員は彼女一人ですが、皆様一人一人のお陰で、孤独な状態には置かれていません。

私は、2010年の10月にマリア・テレサの初誓願のために東京を訪れた際、次のようなメッセージを残しました。

.....

“今日アリانس・マリアルは、皆様の国に、育てる必要のある小さな芽を蒔きました。この芽は成長しようとしています。それは私達一人ひとり、またここに参列して下さっている皆様一人ひとりの責任にかかっています。ですから、マリア・テレサを皆様に委ねます。

兄弟的な友情で彼女を包み、彼女と共に祈り、彼女のために祈り、彼女の人生における選択を支えてあげてください。私としては、今日皆様が彼女の傍らで列席して下さっていること、また、とりわけ将来に向かって、彼女がアリانس・マリアルのメンバーとして、今この時から、マリアニスト家族の中に迎え入れられることを、心から感謝し続けています。”

.....

今日私は4つの枝が日本に存続していることに対して、再び感謝します。日本における(アリانس・マリアルの)未来を信じています。家族の中で、彼女に居場所を与えることによって、マリア・テレサを迎え入れて下さったことに対して、彼女だけでなく、アリانس・マリアル全体までも受け入れて下さったことに対して感謝します。皆様マリアニスト家族が、お互いをより良く知り、鮮明な交わりの中でマリアニスト家族として成長していること、彼女が自分の使命に応えていること、つまり、キリストがマリアと共にあるこの世の中に与えて下さっている計らいに感謝します。

皆様に丁重にご挨拶申し上げます。

私の皆様に対する、兄弟的な祈りに心をお留め下さいますように。

クリスチャン・バルボー

(Christiane BARBAUX, Responsable Generale)

これは私、田中正江が「MARIANIST」誌にアリانس・マリアルの50年の連載記事を掲載するにあたり、読者に宛てて総責任者から送られたメッセージです。

(MARIANIST 103号/2012年7月～109号/2014年1月にかけて7回に渡って掲載)

[1] アリアンス・マリアルとは



アリアンス・マリアルは、「在俗会」です。かつては、在俗修道者と呼ばれてきた私達の生き方は、ある時期まで、公には、社会においても、教会の中でさえもほとんど知られることのない、秘められた、私的なものでした。信仰の熱意に拠るものや個人的な事情、政治的な宗教弾圧に拠るものなど、その道を選んだ理由は、多岐に亘ると思われますが、修道者の立場や誓願はその周囲の人びとや関わった司祭にしか知られることのない生き方でした。

このような在俗修道者の生き方が、正式に聖座に承認され、教会に認知されるようになったのは、1947年に、教皇ピオ12世によって発布された「プロヴィダ・マーテル・エクレジア」(PROVIDA MATER ECCLESIA)～キリスト教的完徳の修得に関する教会法上の身分および在俗修道会についての聖庁大勅書～以降です。

“今世紀においてこのような会 (Instituta Seculararia = 日本語では在俗修道会、すなわち正式な修道会ではないが、世間において修道者に等しい福音的勧告に基づいた生活を営む会) は、静かにその数を増していき、あるものは独立して、あるものは修道会とさまざまな仕方と合体してといったように、形体のまちまちなものがたくさん出てきた。しかし *Conditae a Chirisito* という聖庁大勅書は修道会についてはなにも規定していない。現行教会法もこれらの在俗修道会については、故意に沈黙しており、これに関して制定すべきことを、まだその時機と思われなため将来の立法に委ねた。

これらすべてをわれわれは良心の義務の故に、そして世間の中にあって、けなげにも聖徳に向かって努力する人びとに対する父親のような愛に促されて、繰り返し考慮した。同時に諸団体を賢明・厳密に区別できるようにすること。完徳への生活を義務としていることが証明できるものだけを真の在俗修道会として認められるようにすること。設立に賢明と慎重とを欠くことが珍しくないために、やたら新しい在俗修道会ができる危険を避けるようにすること。認可が与えられる在俗修道会資格のある在俗修道会には、その本質、その目標、およびその状況に完全に適応するような法的規定を持てるようにすること。こうしたことをわれわれは考慮したのである。”

以上、聖座が在俗修道会の存在を正式に承認する経緯について述べている部分を抜粋して、紹介させていただきました。世界中には、数知れない程の信心会、在俗会が存在すると思われませんが、聖座で正式に承認されている在俗会は、上記の大勅書にもあるように、聖座が法的に定めた一定の基準を満たしたもののみである、と言えるでしょう。

アリアンス・マリアルは、現在フランスのラ・ロシェルの司教の認可の下に置かれている会ですが、将来的には正式に聖座に承認されることを願い、目指しています。

まだ日本においては、在俗会について正しい認識を持っていない信者も多く、そのような方々が私達在俗会員について、「シスター」と呼ばれることもあります。私達在俗会員の立場は「信徒」です。どこの会の会員も、それぞれの小教区に信徒として所属しています。ですから、私達の立場は「奉献された信徒」とも言われています。

日本には聖マリア在俗会、聖ヴィアンネ会、ノートルダム・ド・ヴィ(いのちの聖母会)を初めとする、多くの会が存在すると思われませんが、その実態はわかっていません。なぜなら、多くの会が日本においては創成期にあり会員の数も少ないことや、修道者の方々のような、在俗会全体で構

成している、修道者会や連盟のような組織がないこともその理由の一つだと思いますし、私達在俗会員の使命の在り方も理由となっていると思います。

私達**在俗会員の使命**は、福音書で記されている地の塩（マタイ 5・13）、パン種（13・33）のような存在です。教会や社会の奥深くに入って、中から、内側から、福音化のために働きかけて行く存在です。教会の中で目立たない存在です。決して多くの人の前に立って、自分の立場を表明し指導し、働いていくような存在ではありません。そのため、自分が**在俗会の会員**であることを、会員以外や一部の**人以外には明かしていない人も少なくありません**。

在俗会は修道会と同様に誓願を立てますので、そのための養成期間（志願期、修練期）も存在しますが、その養成の行い方は、会によって様々です。養成期のみ、共同生活を行っている会もあります。私達**アリアンス・マリアル**のように、入会前の生活のスタイルを変えることなく養成期間を過ごす会もあります。養成そのものも、その会独自で行っている場合や、アリアンス・マリアルのように同じ霊性を持つ修道会の方がたによって行われている会もあります。

生活形態も、一部の会員が共同生活をしている会、全ての会員が、独自の生活スタイルを持っている会など様々ですが、どの会も、修道生活ではなく、普通の人と同じような生活スタイルを維持していると思われます。アリアンス・マリアルは全ての会員が原則として、独自の生活のスタイルを持っています。仕事についても、会として事業を持っている在俗会は稀で、ほとんどの会員は一般の人と同じように、さまざまな職業について、奉仕活動を行っています。

在俗会、とりわけアリアンス・マリアルについて説明させていただくと、アリアンス・マリアルにとって重要とされていることは、どのような仕事や活動を行うかではなく、世俗の中において、**世俗の人が求められている、担っている生活の在り方の全てを受け入れ、世俗の人達と共に生きて行くことです**。

私達の会には、ハイチのメンバーが1人います。皆様もご存知のように、ハイチは数年前に、大きな地震に見舞われました。その地震によって、彼女は、家が半壊し、仕事も失いました。けれども、彼女は会からも、在俗会員としても、援助を受けることなく、地震に見舞われたハイチの人達とあらゆる困難や貧しさを共に受け入れ、今日までそれらと闘って生きています。チリでも同じように、大きな地震がありました。コートジボワールでは、内戦が勃発し、家を焼けだされた会員もいます。その他の国でもさまざまな事が日々起こっていると思われますが、私達の会員はその全てを世間の人達と共に受け入れています。**例え何が起ころうとも、世間で生きる人と同じように、世間の人達と共に、その全てを受け入れて生きていく、これがアリアンス・マリアルの会員の生き方です**。

最後になりますが、多くの在俗会の中でのアリアンス・マリアルの最大の魅力は、同じ霊的家族を持ち、その家族によって育てられ、その家族と共に協力し、生きて行くことです。つまり、**アリアンス・マリアルには教会のかたどりのような、家族がいるということ**です。

私も日本のマリアニスト家族によって、在俗会員として今日まで育てられてきました。

「アリアンス・マリアルの50年」の中にも記されていますが、2012年の秋、ハイチにおいて、マリアニスト家族の枝の1つであるマリア会の若い会員が犯罪に巻き込まれ、亡くなりました。これを機にマリア会はハイチから撤退することになりました。その結果、ハイチ国内に、アリアンス・マリアルの養成者はいなくなり、ハイチの修練者は初誓願を前に会を去っています。

[2] アリアンス・マリアルの50年間の歩み

50年間。これは、2011年にその記念を祝った私達アリアンス・マリアルが歩んで来た歳月です。

パリに近いアントニーにあるサン・ジャン修道院の礼拝堂で、1人のフランス人の女性がアリアンス・マリアルにおいて初誓願を宣立し、1962年1月22日に、彼女を責任者として、会は発足しました。ただ、その当時、会は「奉献されたマリアの兄弟会」という名を用いていました。



当時のサン・ジャン修道院とその聖堂

かなり困難な最初の1年間が過ぎ去った後、翌年から兄弟会はついに活動を始めました。ベルギーのレーヴで8月の1ヶ月間、黙想を行い、その終わりに彼女は最初の総責任者に正式に任命され、同時に誓願の更新を行いました。また同時に別の1人の会員も初誓願を宣立しました。そして、マリア会のノエル・ルミール神父が会の最初の霊的指導司祭となりました。

その後の数年間、兄弟会は成長し続けました。創成期から会は、国際的な地位にありました。最初の会員の中には、いち早く1人のスイス人会員が会に招き入れた数人のベルギー人がいました。

1966年には、ルミール神父がフランス管区の管区長に任命されたため、ジャン・バプティスト・アルムブルステル神父が兄弟会の霊的指導司祭の任務を受け継ぎました。

けれどもルミール神父は霊的指導司祭の任務を降りる前に、兄弟会の会員に、置き土産として、「アリアンス・マリアル」という名称を会に授けてくれました。「兄弟会」から「アリアンス・マリアル」に名称を変更したのは同時代に発展しつつあった「マリアニスト兄弟会」と混同されないためにでもありました

「アリアンス・マリアル」は初めに仮の会則で生活していました。けれども1965年以来、最初の霊的指導者であるルミール神父の貴重な力添えによって、正式な会則を作成するために、年の黙想の後に行われた2日間の会議の間に、仮の会則の章をグループ全体で習慣的に勉強するようになりました。ルミール神父の後を受け継いで、アルムブルステル神父が会の霊的指導司祭に就任した後、会則の原文は最終的な修正がなされ、私たちが常時手にしているアリアンス・マリアルの会則に至りました。完成した会則は1995年にフランス西部のロシェとサントの教区のモンセニョール・ジャック・ダビデ司教の承認を受けました。

同じ時期、最初の責任者の先導の下、4人の会員からなる評議会の参加によって、アリアンス・マリアルは組織作りを成し遂げました。

ここで、私たちの会は、男女混合の会であった時期があることを付け加えておきます。ある期間、グループの中に1人の青年が存在していました。けれども彼は修練期を終えることはできませんでした。

アリアンス・マリアルは、初めから、「世に散らばる」という運命の下に誕生しました。会員達はフランス全土に散らばっており、私達がすでに目にしているように、その状態は、他の国にまで広がっています。

更に、最初から、「Liens (リャン)」（日本語で「絆」を意味する）というタイトルの印刷物が、会員の下に定期的に送られていました。私達はその中でお互いの消息を提供し、また、私達が感

謝しつくせないほどに、私達の手助けをしてくれている、様々なマリアニストの修道者の方々が作成した各会員の養成状況を記したものによって、共に歩んでいました。

その当時手助けをしてくれていた修道者の方々の殆どは、その役目から離れてしまいましたが、幸いにも、その当時の何人かは、今でも私達を手助けしてくれています。そのうちの 1 人がアンドレ・パウレット神父です。

1973 年の年の黙想の中でアリアンス・マリアルに大きな変化が訪れました。当時の会の総責任者は会則の作成を実際に成し遂げ、それを実行に移す時が来たと判断したのです。そして、彼女はそのため会の総責任者と評議員の選挙に取り掛かりました。けれども、彼女自身が再選されることは固く望みませんでした。それ故に、彼女に続いて会に奉献した会員が、完成した会則を基盤として歩み始めた後に実施された第 1 回目の選挙によって、総責任者に任命されました。

更にその 2 年後、アルムブルスター神父は霊的指導司祭の任務の交代を会に要請しました。そのため、1976 年の 6 月にベルナルド・ヴィアル神父がアリアンスの霊的指導司祭となりました。

翌年、「会則を日々の生活の中で、如何に実践できるか、どのように実践していかなければいけないか」ということをより良く理解するために、会則の解説書を作成するよとの指摘がなされました。その作業には一度に、多くの時間と手間を要しました。毎月、Lien (アリアンスの情報誌) の中で、会則のある章が提示され、それに対してのコメントの回答が会員に求められました。会の総責任者は、回答されたものについて、早速ヴィアル神父の助けを借りながら評議会で検討し、それを要約した上で、承認を得るために各会員に内容を送りました。それは長きに渡った困難な仕事でした。けれども、完成したものは、会員達が期待していたものには至っているとは思えませんでした。解説書は修正がなされ、ノート形式で発行されましたが、それは今でも使用されています。

1980 年代の初め、不運なことに、会の総責任者の健康状態が悪化し、1983 年にその任務を放棄せざるをえなくなりました。そのため総会において、新たな総責任者が選任されました。

今ここで、その当時のアリアンス・マリアルの状況に遡って見ると、その当時アリアンス・マリアルには数人の会員しか存在していませんでした。多くの人々が会を離れ(とりわけ、ベルギー人の会員が)、会員は 13 人まで減少していました。その当時の私達は、マリアニスト家族の枝の 1 つと言える状況ではなく、むしろ、マリアニストの在俗会というものについて知ってもらうことを主要な目的としていたと言える状況にありました。

そのような状態にあっても、前総責任者が賢明に指導し、機転をきかせたことで、会員達は散らばって生活しているにも関わらず、強い絆で結ばれ、1 つのグループとして一致していました。その上、マリア会は「ヴィアル神父がアリアンス・マリアルの霊的指導司祭であり続けてくれる」という、誠意ある贈り物をしてくれたのです。会の楽観主義と性質によって、会員達は希望を持ち続けていました。すぐに数人の志願者が訪れました。これは会にとって、「たいしたことではない」と言うには及ばない出来事でした。1 人はやがて会の総責任者となる女性、もう 1 人は若いにも関わらず、かつて「フラテルニテ・マリアニスト」の責任者を務めていた女性でした。2 人共アリアンスのメンバーと共に歩むために、志願者となったのです。

1988 年にヴィアル神父はアリアンス・マリアルの霊的指導司祭としての任務の交代を申し出ました。マルセル・クラン神父が私たちの新たな霊的指導司祭になって下さったのはその時でした。

そして私たちは彼と共に、ヨーロッパの外まで、アリアンス・マリアルを広げ始めました。実際に、マリアニストの修道者達に支えられて、1 人のチリの若い女性がアリアンス・マリアルと

コンタクトを取るようになり、会員になりたいと申し出ました。それはまさしく喜びを超えて、驚きの瞬間でした。

“私たちはお互いのことをどのように知り合ったらいいのでしょうか？・・・そしてどのように彼女を養成していったらいいのでしょうか？”

当時の総責任者はまず最初にそう感じました。彼女は霊的指導司祭であるクラン神父に会い、その件について討議しました。その後アリアンス・マリアルは、御摂理に委ねながら、大きな冒険とも言える、新たな船出を始めました。この喜ばしい出来事の中での数年の後、総責任者はラテン・アメリカにアリアンス・マリアルを根付かせるために、初めてチリに向かいました。そして、チリにアリアンス・マリアルのメンバーが誕生した後の、2000年代にはエクアドルからもアリアンス・マリアルのメンバーが誕生しました。

この間にアリアンス・マリアルは、**マリアニストの在俗会として、公に認められる存在**となりました。

1995年は、当時の総責任者が、“アリアンス・マリアルが本当の意味で世界に広がって行った”と感じている時期でした。ヴァンサン・ジザル神父のおかげで、“Joades”（マリアニストの国際組織）という組織の初期段階へ、アリアンス・マリアルが正式に参加したことによって、アフリカのコート・ジボアールのマリアニストと、初めてコンタクトを取るようになりました。

1996年には、アリアンス・マリアルはローマに於ける世界マリアニスト家族評議会の創設に加わりました。（既にフランス国内に於いて、アリアンスはマリアニスト家族評議会に参加していました）

このような状況の中で、クラン神父はアリアンス・マリアルの霊的指導司祭の任務の交代を申し出ました。その結果、アルベール・バッフレー神父が新たにその任務を引き受けてくれることになりました。

1998年に会の新たな総責任者が選出されました（任期は1998年～2008年）。この時からアリアンス・マリアルは本格的に国際的な規模となり、マリアニスト家族の中で第4番目の枝としての位置を確立しました

また、総責任者のアフリカへの旅は、コート・ジボアールだけでなく、トーゴやコンゴ民主共和国、コンゴ共和国にも会を根付かせました。

その後、他の国や大陸・・・カナダ、ハイチ、日本からも志願者が出現しました。マリアニスト家族の修道者達、修道女達の助力のおかげで、アリアンス・マリアルはあらゆる面で発展しました。かれらの助けなしにはこの発展は何一つなし得なかったでしょう。

2008年には現在の総責任者が選出されました。彼女はその時から今日に到るまで、新たにアリアンス・マリアルの霊的指導司祭に就任したジャン・エドワード・ガチュアン神父の助力のもと、私達会員の歩みを導いています。

2011年アリアンス・マリアルは創設時より50年の時を迎えました。

1973年当時に存在していた13人の会員は、最初の責任者だった会員を含め、多くの会員が神様の元へ召されました。私達は、彼女達が、ある意味では創立者と言える、アリアンス・マリアルの発展を感謝しながら、主と共に、私達のためにとりなしてくれていることを確信しています。

[3] 50周年を迎えたアリアンス・マリアルとその後

アリアンス・マリアル創立 50 周年を迎える直前から会員が住む様ざまな国で、災害や内戦等に見舞われ、会員は現実の生活において、様ざまな試練と立ち向かわなければなりませんでした。

2011 年の 1 月にはハイチで大地震が発生し、会員の 1 人は家族を失い、自分が住んでいた家にも大きな損傷を受け、生活面で様ざまな試練を受けました。同年 2 月には今度はチリで大きな地震が発生し、会員達に直接の被害はなかったものの、チリでは 800 人を超える人達が亡くなりました。また、同年 4 月には 2002 年から数年に渡った内戦が再燃し、会員の 1 人は家を焼け出され、他のコートジボワールの会員達も生活の困難と恐怖に立ち向かわなければなりませんでした。

皆さんも周知のように、同年 3 月には日本の東北地方と近隣地域で大きな地震と津波が発生し、多くの人々が亡くなり、行方不明となり、生き残った人達も、現在に至るまで、様ざまな試練を強いられています。また、同時に発生した原発事故により、放射能による大きな被害と恐怖も襲い続けています。

全世界の会員が、大きな試練を迎えた会員達とその国のために、必死に祈り、メッセージを送るなどして、靈的に、精神的に励まし合い、会員としての絆を強め合いました。それによって、今日において、乗り越えられた、乗り越えつつある試練もありますが、結果的に乗り越えることができなかった試練もあります。

ハイチでは 2012 年 8 月にマリア会の 1 人の若い会員が暗殺され、それによりマリア会はハイチからの撤退を余儀なくされました。そのため、私たちアリアンス・マリアルの 1 人ハイチの修練者は養成者を失うことになり、会員としての養成の日々を続けられなくなり、初誓願を目前にして会を去らざるをえなくなりました。

また、日本におけるアリアンス・マリアルの養成に携わって下さっている清水一男神父のためにアリアンスの文書をの翻訳してくださっていたカナダ人のマリア会員も、修道院の閉鎖作業のためにハイチに滞在している際に、殺害されてしまいました。

ハイチにおける一連の出来事は、アリアンス・マリアルの会員にとって大変辛い出来事であったと同時に、マリアニスト家族の存在なしには、アリアンス・マリアルの会員として歩むことは決して出来ないことを再確認する事実となりました。

このような悲しい出来事の中、うれしい出来事も起こりました。2012 年には、ペルーにおいて、初めてアリアンス・マリアルの志願者が 3 人誕生しました。

また同じ時期、チリにおいては 1 人の、トーゴにおいては 3 人の志願者も新たに誕生しました。アリアンス・マリアルにとっては大きな恵みの時となりました。

2015 年、アリアンス・マリアルは、インターネットを通して、半年に渡って全会員による総会を行い、総責任者の再選出と新たな評議員の選出と共に、会の靈性や運営方針を初めとする様ざまなことについて、祈りのうちに話し合い、新たな歩みを始めています。

✦ 会員の現況（2015年11月現在）



✦ フランス、ベルギー、スイス ① ② ③

終生誓願者・・・11人
（内1人はベルギーで生活している
コンゴ人の会員）

✦ コートジボワール ④

終生誓願者・・・13人
有期誓願者・・・1人
ポストラン（志願者）・・・1人

✦ トーゴ ⑤

終生誓願者・・・4人
有期誓願者・・・7人
修練者・・・4人

✦ コンゴ共和国 ⑥

終生誓願者・・・1人

✦ コンゴ民主共和国 ⑦

終生誓願者・・・2人

✦ カナダ ⑧

終生誓願者・・・2人

✦ エクアドル ⑨

終生誓願者・・・2人

✦ ペルー ⑩

修練者・・・3人
ポストラン（志願者）・・・1人

✦ チリ ⑪

終生誓願者・・・3人
修練者・・・1人

✦ 日本 ⑫

有期誓願者・・・1人

ロシェとサントの教区の司教の認可のもとに歩んできたアリアンス・マリアルは、会の現状、メンバーが存在する国の地理的な現状などを踏まえ、会の評議会の決議の下、2016年1月1日、神の母聖マリアの祭日に、マリアニストの創設の地であるボルドーの大司教のもとに新たな歩みを初め、同時にここをアリアンス・マリアルの本拠地と決めました。

アリアンス・マリアル の マニフィカト



限りなく善良な父よ、
私たちは貴方に向かって感謝と賛美を掲げます。
貴方は全ての大陸において、貴方が全ての人間にもたらした、
愛する御独り子を明らかにするために、
私たちを奉獻生活へと召されました。

父よ、私たちに御子をお送り下さったことを感謝します。
独り子は私たちに、貴方を「父よ」と呼ぶことを教えられました。
独り子は貴方に向かって歩む道の中で
私たちを堅固なものにするために、
私たちの飢えを満たし、渇きを癒すために、
日々御聖体の中でご自身をお与えになります。
貴方は私たちにマリアをお与え下さいました。
マリアは愛する母であり、私たちの歩む道において
そっと寄り添って下さる方、貴方の愛を告げる方、祈りの鑑となる方です。
ご訪問においてマリアはエリザベットの家に御子をもたらしました。
私たちがマリアのように最愛の御子を、
私たちの家族に、兄弟姉妹に、社会の中で見捨てられた人々にも
もたらすものとなりますように。
私たちは聖霊が示して下さる、貴方の計り知れない愛情と
汲みつくすことの出来ない憐れみを信じます。
私たちは貴方が私たちに委ねられた宣教活動の中で
より良くマリアに仕えることを、マリアの宣教活動の努力において
教会により良く仕えることを、願っています。

父よ 貴方の愛の霊の故に、貴方は賛美されますように。
貴方は誠実な神、命の泉です。
貴方は私たちすべての人間が本来何者であるか
私たちが共有している「人間」というものの全てを御存じです。
貴方は貴方がお創りになった者一人一人に、たゆまず繰り返されます
「私は貴方を愛している」と。
貴方の御言葉を信じるが故に私たちの喜びは測り知れません。
私の父よ、私たちすべてのものは、
永遠に貴方のものでありたいと思いがれています。
貴方の更なる栄光のために、世界の救いのために、
私たちがマリアと交わした契約を通して、
私たちマリアニストの創業者たちを掻き立てた
宣教に対する熱情によって、
この世の人々が、貴方の御独り子を知り、愛し、
貴方の御子イエスに仕えるものとなりますように。

アーメン

